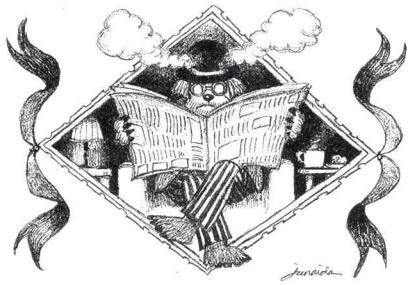
朝日歌壇 俳壇



〈日曜日のブローチ　12〉　junaida

川野里子選

地下鉄の階段下から声がするあれは空爆から逃げた人々　（石川県）瀧上　裕幸

黙禱を終へて見上ぐる空の青わづかに吾は整へられて　（神戸市）山本みさよ

着いたあと日傘をとじて駅までの陽のぬくもりをくるんと仕舞う　（和泉市）星田　美紀

さあ今日もベッドで自己流体操して独りで生きる　見ててください　（高松市）高崎　英子

現実が仮想世界に見ゆる日々煙まさしくバチカンに立つ　（藤沢市）大内　菅子

交代のサイレン響きて朝六時吾はやうやう人に戻りぬ　（須賀川市）伊東　伸也

今もなお箸の持ち方違ってる鍵っ子のまま大人になって　（金沢市）竹内　一二

趣味持たず仕事一筋亡き父の銭湯の下駄箱いつも3番　（堺市）川口　伸

戦死者の星印ある墓のめぐり除草剤撒くアメリカ製の　（関市）武藤　修

「クマ出ます。戸を閉めて下さい」山裾の食料品店に貼り紙がある　（秋田市）高橋　りか

【評】一首目、入ろうとする地下鉄に戦地の映像が重なってしまう。二首目、黙禱は生きている者のためなのか。五首目、ゆらぐ現実世界。新しい教皇が誕生した煙のリアリティーを嚙みしめる。八首目、父はヒーロー長嶋を心に秘めていたのか。

佐佐木幸綱選

早乙女の衣装をつけて一心に苗植える子ら白山の下　（石川県）元宮ゆき子

カタカナの「コメ」ではちゃんと伝わらぬ八十八回手間かけること　（東京都）北條　忠政

人の声届かぬ森へやって来て有人レジに並ぶコンビニ　（筑後市）近藤　史紀

蛇来ても雪加騒がず巣を捨ててまたも巣作る雪加よ雪加　（津市）中山　道治

ミカン園寄る年波には勝てません百本切ってソーラーにする　（国東市）木村　弘治

餃子で酒のむ女に憧れて結婚すれば夜ごと酒盛り　（三郷市）木村　義熙

かろうじて動く指先パソコンに「ありがとう」と打ち妻は逝きたり（高松市）島田　章平

母の日に電話をしたが母さんは「をらん」といつて電話を切つた　（蓮田市）石橋　将男

☆肩たたき券まだ持つてると呑み会に言へばおれもと三人がわらふ　（西条市）村上　敏之

週に二度「夫」と記す面会簿まる八年も療養の妻　（吹田市）船越　一英

【評】第一首、古くから地元に伝わる「御田植の儀」に取材。第二首、「米」という文字を分解すると八十八になる。第三首、人間がレジを担当するコンビニには、人の声が届かない森まで行かないと出会えない、という。

高野公彦選

長嶋茂雄昭和の生んだレジェンドが奇しくも昭和百年に死す　（横浜市）森　秀人

矢のやうな一塁送球しなやかに伸びし右手と指の残心　（八尾市）水野　一也

長嶋が愛したカツ丼また食べに行きたい立教大学学食に　（横浜市）臼井　慶子

この国にとんと見かけぬ「井戸塀」がウルグアイ国に居たる嬉しさ　（東京都）上田　国博

新米が穫れても古米古米を食べて暮らしぬ昭和の親たち　（安中市）岡本千恵子

副食は貧しけれども腹いっぱい食わせてくれた米作りの父　（安中市）鬼形　輝雄

墨の香の残る教室くきやかな六年生の「道」という文字　（奈良市）山添　聖子

「地球より命は重し」と言ひ継がれ千三百のガザの子ら死す　（稲敷市）坂元　善典

世界的経済不況招くならのちに言われむトランプショックと　（千葉市）鈴木　一成

命名にこうぎするがに愛らしい花弁をみせて匂うどくだみ　（盛岡市）山内　仁子

【評】1首目～3首目、6月3日に逝去した長嶋茂雄氏に対するそれぞれの熱い思い。4首目、ウルグアイの元大統領ムヒカ氏を讃え、その死を悼む歌。「井戸塀」は、政界に乗り出して私財を使い果たし、井戸と塀しか残らないような清貧さを言う。

永田和宏選

麦めしにまじる白米を片寄せて弁当箱に詰めくれし母　（松戸市）猪野　富子

古古古米もしもありなば誰も彼も貪りにけむ昭和二十年　（東京都）上田　国博

愛猫のごはんは二キロ五千円主人は横で古古米を食む　（小郡市）松本　智子

少し前「行って来ます」は禁句なり「行きます」と言えの世があったのだ（湖南市）鈴木　強

学生は学生服があたりまえミスター入団詰め襟の黒　（大和郡山市）四方　護

夏の日に生涯閉じしその人は長嶋茂雄を演じ切りたり　（八王子市）額田　浩文

廃船を洗ふ漣港町人の数より犬猫の数　（国東市）木村　弘治

ニンジンが嫌いだったと打ち明けて七日後妻は独り旅立つ　（相模原市）井上　満

再任用臨任講師非常勤子らにとつては変はらぬ「先生」　（稲敷市）坂元　善典

☆肩たたき券まだ持つてると呑み会に言へばおれもと三人がわらふ　（西条市）村上　敏之

【評】飯のなかの白米だけを目立つように片寄せてくれた母の切ない思いを詠う猪野さん。古古古米さえ食べられなかった戦後を思い出す上田さん。猫のほうが夫より高い飯を食っているという松本さんには笑ってしまうが、どれも世相を映す。

俳句時評　「旧派」の実態とは

岸本　尚毅

明治以降の俳句史の出発点は、正岡子規による俳句の近代化だといわれる。旧弊な「月並俳句」を刷新したのが、「新派」たる子規の改革だという説明は単純明快で便利である。

ところが、いわゆる「旧派」の実態は案外知られていない。それを調べあげたのが秋尾敏の近刊『子規に至る　十九世紀俳句史再考』（新曜社）である。

本書によると、幕末から明治にかけては俳人たちも国学の影響を受けた。彼らは新政府の下で「教林盟社」や「明倫講社」という団体を作り、神職や僧侶と並んで「教導職」という官職を得た。この時代の俳人の社会的な活発さとしたたかさは、風流韻事のイメージとはほど遠い。以下、彼らの句を引く。

〈名のないは一ひらもなき落葉哉〉は国学に傾倒した田川鳳朗の句。個々の存在がそれぞれ「自我」を持っているという思想がうかがわれる。

〈今朝からの冬とは見えず舘山寺〉は教林盟社の幹部、橘田春湖の句。廃仏毀釈による寺院の荒廃という「重いテーマ」を「凡庸な光景で覆い隠した」「カムフラージュの文学」だと本書はいう。

〈釈迦のみと思ふ愚や人の秋〉は教林盟社に対抗して設立された明倫講社の社長、三森幹雄の句。「玉華金液」と前書があり、飲酒戒に従う人を「愚」と嘆いた。これらの句は、幕末明治の変革期に出現した俳句の一様相といえようか。

明治期を通じて勢力を持っていた「旧派」だが、その後はどうなったのだろうか。今後の俳句史研究の課題として、興味深い論点である。

（俳人）

風信

山田佳乃著「山田弘子の百句」　弘子はホトトギスの俳人。著者は娘で「円虹」主宰。副題は「伝統に新風を」。「みな虚子のふところにあり花の雲」（ふらんす堂・1650円）

岸本葉子著「ゼロから俳句　いきなり句会」　予備知識なしでも俳句を作れる方法、季語力の鍛え方、句会への参加の仕方を丁寧に解説した入門書。（笠間書院・2090円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は**無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号**を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき